



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1989

発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 電話(0797)31-3452

自由を妨げる 偶像を捨てよう

1 日曜日に聞いた神の御言葉は皆さんに一つの問題、あるいは、挑戦を突き付けているようです。信仰とその結果としての人生のプログラムについて一つの選択をするよう、断乎とした強い決心をするよう招いているかのようです。

2 「誰に仕えたいかを今日えらぶが良い」とヨズエはシケムに集まったイスラエルの民に尋ねました。人々の応えは決然たるものでした。即ち、「ほかの神に仕えるため主を捨て去るうなどとは決して考えない。したがって我々は主のみに仕える覚悟である。主こそ、我々の神だからである。」(ヨズエ24・15、16、18)

3 今日の招きは私たち全員に向けている偶像、神への旅路を歩む自由を襲う偽りの神々を捨てねばならないのです。往々にして人間は超自然

的な見方に欠けた、現世的で貧弱な人間的な見方に合った神を選びがちです。霊的(精神的)生活どころか、むしろ官能的で物質的な生活をするよう誘惑されることが極めてひんぱんであることは誰もが気付いています。時には現世的な今だけの安全や確かさだけに頼り過ぎるがために、キリストの御約束をほとんど当てにしないくなるのです。主は永遠に向けて心を開け、私の言葉を信じる決心をせよ、と求めておられます。「御身は永遠の言葉をおもちです」、これこそ私たちが主に差し上げるべき応えです。「私たちがまた、主に仕ええしみます」と。

4 このような返事は二重の源から来ます。すなわち、それぞれに信じる可能性を与える神の力と、すべての人が真の選択をするための基礎となる人間の自由との二つから出るのである。信じ、そして決心する

5 ここにおいて人間に対する神の神秘的なへりくだりが見られます。崇高な愛の永遠の御計画、これによって神は御自らをお捧げになります。さらに、神の秘義へと開かれていたための恩寵と、永遠の真理に与り「霊と命である」主の御言葉を知り味わう恩寵を、神は御子において私たちに与えられます。しかし、返答は人間に行動を促す機能である自由からも出てきます。神は私たち一人ひとり自由な存在としてお創りになりました。ですから人間は神が常に自由な人間にお与えになる善に、没頭することができのです。キリストは、その自由を訴えておられるのです。そして、ペトロのそのように責任を伴った真の返答が自由から出るの

6 「主よ、どなたのところへ行きますか。恐らくこの問いこそは私たちの経験と文化の一部を示す深い疑いを表明するものでしょう。私たちは自らの信仰を顧み、福音の教えをより深く理解するため、そして神の御言葉にますます熱心に自らを委ねるため、福音の教えを再評価しなければなりません。幸いなとおとめマリアは、私たちの問いに模範的な応えを与えてください。信仰の旅路を歩む教会の中心におられるマリアは、模範として、また決して期待に背く

力をお与えになるのは神です。「父から与えられた人でなければ、私のもとに出来ない。」(ヨハネ6・65) 超自然的なことから選択をすべきとき、私たちは途方にくれることがあります。「肉は何の役にも立たない」からです。霊だけが、神の霊だけが、御父と御子との実体的で永遠の愛だけが、「生かす」のです。(ヨハネ6・68)

7 尊厳のしるし、また責任の源である自由は、神との語り合の場です。その同じ神が霊と真理において神に仕えるよう招いておられます。だから、人間は無理に強いられるのではなく、自由に神に應じることができのです。

8 「主よ、どなたのところへ行きますか。ペトロの信仰を基としたこの問いかけに対して、私たちが信仰を基とした適切な返事をするよう招かれています。恐らく私たちは自分の弱さを感じ、また自らの限界を悟ることでしょう。ひょっとすれば利己主義に閉じ込められる安全第一な態度をとったり、現世的で享樂的な消費主義者のような態度をとったりするよう誘惑を受けるかもしれません。

9 私たちの人生と信仰に関して岩のように重くのしかかってくる問題や疑問にも圧倒されないと信じて、御身によりたのみです。私たちの自由を制限する物質中心の環境にも負けないと信じておられます。キリストに対して、「はい」か、「いいえ」かの返事をすべき緊迫した状態にいる私たちが、御身の御保護によって救いへと向かうきっぱりした返事をするのができますように。聖母よ、御身にお願いたします。どうかお助けください。私たちが永遠の命の言葉を持っておられるキリストの足跡について歩みを進めることができますように。おとめマリアよ、私たちの信仰の旅路を守ってください。慈悲深く、優しい御母よ。アーメン。

自由は人間の尊さのしるし

このない希望として、常に現存しておられるのです。まっさきに信じたマリアは、私たちの魂に、自由に、深遠な応えを与えてください。マリアは、「お告げのときに啓示された神の言葉を受け入れてまっさきに信じました。またすべての試練、十字架の試練をも越えて神の言葉への忠実を保たれたのです。」(贖い主の御母) 43)

11 私たちの人生と信仰に関して岩のように重くのしかかってくる問題や疑問にも圧倒されないと信じて、御身によりたのみです。私たちの自由を制限する物質中心の環境にも負けないと信じておられます。キリストに対して、「はい」か、「いいえ」かの返事をすべき緊迫した状態にいる私たちが、御身の御保護によって救いへと向かうきっぱりした返事をするのができますように。聖母よ、御身にお願いたします。どうかお助けください。私たちが永遠の命の言葉を持っておられるキリストの足跡について歩みを進めることができますように。おとめマリアよ、私たちの信仰の旅路を守ってください。慈悲深く、優しい御母よ。アーメン。

【購読料改定のお知らせ】消費税込導入にともない、平成元年4月1日より購読料等を以下の通り改定致します。●「教皇様の声」年間予約購読…1部 900円・送料 600円(3月31日までにお申し込みの方は除きます)●1部……………定価80円●専用保存ファイル……………定価 750円(送料実費)

イエズス・キリスト 真の神シリーズ ②

キリスト信仰の発展と公式化



1 「われは信ずる(…)唯一の主イエズス・キリスト、神の子

父よりひとり子として生まれ、神よりわち、父の本性から生まれ、神よりの神、光よりの光、真の神よりの真の神、造られずして生まれ、父と一体、天にあるもの、地にあるものは、すべて、主によって造られたと。子はわれら人類のため、また、われらの救いのために、天より降り、受肉し、人と成り、苦しみを受け、三日目に蘇り、天に昇って、生ける人と死者人を救うために来られると。(…) (DS 125参照)

3 教会は最初からこの信仰を守り、後に続くキリスト教徒に

伝えてきました。真理の霊の導きのもと、それを深く研究し、啓示の論拠が示す本質的内容を説きながら教え、擁護してきたのです。ニケア公会議は教義の知識と公式化において画期的な役割を果たしました。キリストに従う全ての人に真の信仰の道を示した重大で荘重な出来事でした。それは、後に起こるキリスト教分派よりずっと以前のことでした。特に注目すべきは、教会が(313年)ローマ皇帝から公の行動の自由を得たすぐ後に、この公会議が開かれたということです。新たな発展の道がキリスト教に開かれようとしている時であっただけに、それはあたかも一つの信仰に留まるようにという使徒たちの意向を示すためであったようです。

2 公会議が表明した教義上の定義をみると、このシリーズで

これまでずっと考察してきた聖書に基くキリスト論の本質を思い起こします。前回すでに述べた通り、それ

4 公会議の定義づけ(公式化)は使徒から伝えられ新約聖書に

記されているイエズス・キリストに

5 ここに記した聖イレネウスの言葉は、その著書『異端論駁』

からの引用ですが、この本はエビオニタスといわれる異端者の説に反論して、キリスト教の真理を擁護する目的で書かれました。使徒に続く教父たちは、姿を変えて次々と出てくる異端に直面し、確か度で明白な真理をその教えの中で幾度となく主張しなければなりません。四世紀初めのアリウスはよく知られています。その名を取って名づけられたアリウス派という異端を起しました。

キリスト教信仰の擁護

6 公会議が公式化した時には、

教会の考えや認識がそのような公式化のためにすでに熟していたといえるのですが、驚いたことにキリストを単に人間として捉え、神とは考えない、昔も今もある傾向に直面して、公会議の教義はまことに今

7 しかし教会は、ニケア公会議

において荘厳に、そしてはっきりとキリストの神性についての真理を確認すると同時に、キリストの真の人性についての真理も主張し、教え、擁護しました。この真理さえも誤った見解や異端の論理的となりました。ここでドケイイズム(ギリシヤ語で「…のように見える」キリスト仮現説)について述べなければなりません。この説はキリストの人性を否定するもので、キリストは真の体を持たず、人間のように見えるだけであると説くのです。神が一人の女から生まれるはずはなく、十字架につけられて死ぬはずもないと主張します。彼らの観点から見ると託身(受肉)と罪の贖いにおいて、私たちは体を幻想として描いているだけということになるのですが、それは新約聖書のあらゆる章句に示された啓示に真向から反対するものです。ヨハネは、「イエズスが肉体をとって下られたキリストであること」(ヨハ

説教・講話・書簡等の抄記

ネ④4・2)「みことばは肉体となつて(ヨハネ1・14)と記していますし、パウロも、肉体をとったキリストは「十字架の上に死ぬまで(…)従われた」(フィリッピ2・8)と記しています。

明確な証言

8 啓示に基く教会の信仰によると、イエズス・キリストは真の人です。ですからキリストの人間としての御体は真の人間の霊魂によって生かされています。この点に関して初代教会の教えは、使徒や福音史家の証言と合致します。そしてテルトウリアヌスの『キリストの体』13・4)のような最初の教会学者の教えとも合致します。テルトウリアヌスは、「キリストにおいて、霊魂と体を見出す。つまり人間の霊魂と人間の体」と書いています。しかし、この点についても反対の意見がありました。特にラオディキアの司教アポリナリス(シリアのラオディキアにて30年生、390年頃没)や、彼に続く人々(アポリナリスとして知られている)です。彼らは、キリストは真の人間の霊魂を持たない、神のみことばがその代わりをする、と考えました。確かにこの場合もキリストの真の人性は否定されています。

9

教皇ダマソ一世(366年-384年)は、東方の司教への手紙の中で、アポリヌスとアポリナリスの間違いを指摘すると共に否定しました。「一方(アポリヌス派)は神の子の中に不完全な神性を置き、他方(アポリナリス派)は人の子の人性が不完全なものだ、と誤って主張している。もし神の子が完全に人間になれな

たら神の働きは不完全なものであり、私たちの救いも不完全である。そうすれば全ての人が救われることにならない。(…)人間の充滿において救われたことを知っている私たちは、カトリック教会の信仰に従って完全な神がその完全さにおいて人性をお取りになったと宣言する。」ニケアの五十年後に書かれたこのダマソ一世の手紙は、おもにアポリナリストに向けられたものです。数年後の第一コンスタンチノーブル公会議(381年)は、アリアニズムやアポリナリズムを含む当時の異端の全てを咎め、教皇ダマソ一世が、人間の霊魂(そして真の人間の知性と自由意志)をもったキリストの人性について宣言したことを確認しました。

10

ニケア公会議は救済論を用いて、御父と一体である御子が「私たち人間とその救いのために」人となられたことを教え、託身(受肉)を説明しましたが、ダマソ一世やコンスタンチノーブル公会議もアリアニズムとアポリナリズムに反対して、キリストについての重大な真理を伝えるために救済論を用いました。神の子の真の人性を否定する人にとつて、救済論が新たな方法で示されたのです。全ての人が救われるには、(完全な)全人性が御子の内になければなりません。「取られないものは(つまり)人性をお取りにならなかつた(とすれば)救われることがない。『クレド』への書簡(10)

教義の注意深い公式化

1 アポリナリズムを非難して、カルケドン公会議(451年)は、

キリストについて次のことを宣言し、ある意味でニケア信経を完成させました。「神自身は神性において完全であり、神自身は人性において完全であり、真に神であり、真に人であり、精神をも身体をも持ちになり、神性においては御父と同質、人性においては我らと同質、『罪を除けば我らと全く同様であり』(ヘブライ4・

◆

昨日は、一九五八年十月二十八日教皇ヨハネ23世が登位された日にあたります。あの出来事からすでに30年になります。教皇様の気のおけない人柄、そして教会の伝統に忠実で賢明なその教えを知り愛した人々の心に今なお生き生きとよみがえる、愛すべき父親のような風貌。

◆

ヨハネ23世の自叙伝に見られるように、熱心な司祭として、様々な国での教皇の機敏な代理として、ベニスの大司教、次いで使徒ペトロの代理者としてローマにおいて常に彼を支えたのは、聖母への信心でした。その信心はすでに家庭の中で育まれていました。毎晩ロザリオを唱えていたのです。特にローマの信者と各国から巡礼で訪れた人々と共にお告げの祈りを唱えるというこの日曜日の集いを始めたのは、この教皇様であったのです。

◆

教皇様はよくおっしゃいました。「キリスト信者の助け」という名の聖母のお姿には、私たちの両親の家庭で子供のとき、若いときから何年もの間なれ親しんでいました。(Discorsi Messaggi, Colloqui del Santo Padre Giovanni XXIII,

15参照) 神性においては御父より永遠に生まれ、時至り、我らのため、そして我らの救いのため、人性においては処女マリア・神の母より生まれ、御自身は神のひとり子、我らの主イエズス・キリストである。(カルケドン信経 DS301)

◆

このように、教父と公会議によってなされたキリストに関する教義のIV, p.307) また別の機会には、信者に聖なるおとめマリアに対する純粹の信心を勧めるにあたり、次のようにおっしゃいました。「聖母の唯一の狙いは私たちの生き方をもっと強くすること、十分に準備された効果的な生き方をさせることです。この世で巡礼者である私たち全員をマリアは絶えず助けてくださるのです。マリアの助けを得て、避け得ない悲しみや逆境を乗り越え、平安と喜び

ヨハネ23世、日曜日は始める

アンジェルス

をもって天国を見詰めることができようになるのです。(同上 II, p.707)

◆

教皇様は第二バチカン公会議の直前に、子供の頃から両親と共に親しんでいたロレットへの巡礼を望まれました。公会議の仕事を保護していただくのが目的だったのです。そればかりか、公会議の開会式は一九六二年十月十一日、当時の聖母の母性の祝日にされたのです。

◆

ヨハネ23世は単にロザリオに熱心であるだけでなく、ロザ

注意深い公式化は、常に私たちをただ一人のキリスト、私たちの救いのために人となられたみことばの秘義へと呼び戻してくれまます。そして、啓示を通して知るにつれてキリストを信じ、キリストを愛し、救われ、生命を得るのです。(ヨハネ20・31参照) (DSとは「カトリック教会公文書資料集」のことです。)

◆

リオの使徒でありました。使徒書簡の中で次のように教えておられます。「ラテン教会においてキリスト教信心としてのロザリオは、聖職者にとつてはミサと教会の祈り(聖務日課)の次にくるもの、信徒にとつては秘跡に次いで大切なものです。」晩年には、教皇職に登位されたとき以来の約束をずっと続けるだけでなく、毎日三環(15玄義)を祈っておられました。ロザリオは福音書の要約であり、すべての家庭の霊的な遺産であると考えておられたのです。

◆

先に引用した使徒書簡の中に次の燃えるがごとき言葉を見つけることができます。「汚れなき人々の手に、聖なる司祭の手に、若い人々や年輩の人々の手に、(…)無数の敬虔な人々の手に、心に、そして全人類の中に、平安を求め希望の紋章・旗章として、ロザリオが握られているのを見ることは何とすばらしいことでしょう。」

◆

この権威ある声にもう一度耳を傾け、教会の御母であり御子イエズスの御前に立つ私たちの弁護者であらせられる、聖母マリアの学び舎で私たちも根気よく学んで行きましよう。(八八・十・三十)

不変の教え

神の慈しみ



〔2月号からの続きです。〕

「悔い改めて福音を信じよ。」(マルコ1・15)これは救い主が人々に語られた最初の言葉ですが、ファティマのメッセージも聖書と同じように回心と悔い改めを呼びかけています。

この呼びかけは今世紀の始めになされたものですが、それは特に今世紀への呼びかけなのです。メッセージの婦人(聖母)は、現代の「時の印」を見事に読み取っておられるようです。

この悔い改めへの呼びかけは、まことに母親らしいもの、また力強く決定的なものです。「真理を喜ぶ」(コリント13章参照)愛は、明白かつ明解です。悔い改めへの呼びかけはいつもの様に祈りに結びついています。幾世紀も経た伝統と調和して、このメッセージはロザリオの祈りを取り上げています。ロザリオはまさにマリアの祈りです。ロザリオの祈りの中で、聖母は私たちとの一致を感じ取ってください。ロザリオの祈りは教会や聖ペトロの教座の、世界全体の問題をも包み込むものです。ロザリオの祈りを唱える時私たちは、罪人を出し、彼らが回心し救われるよう願うと同時に、練獄の靈魂のためにも祈ることになります。メッセージは七歳から十歳の子供に向けられました。ルルドで

のベルナデッタのように、神の御母の出現の対象は子供たちなのです。ファティマの子供たちは、このメッセージの協力者となりました。そして、そのうちの一人は現在もなお生存しています。

ロザリオの祈りを勧めよう

十字架上で、婦人よ、これがあなたの子だ(ヨハネ19・26)と言われた時、イエズスは新しい方法で聖母マリアの心を捉えました。無原罪の心を開いて、新たな愛の広さと拡がりを示されました。マリアは、十字架の犠牲の力のおかげで聖霊においてその愛へと招かれていたのです。ファティマの言葉に母の愛を見ることで、聖母の愛は神へと向かう人間の歩み全体に及びます。この世を通り、さらに世を越えて練獄を通していく道全体に及ぶ愛なのです。救い主の御母の心遣いは救いの御業、御子の御業についての心遣いです。それは全ての人々の永遠の救いを配慮する愛なのです。(…)

母の愛ということを考えるとファティマのメッセージがよく理解できます。人間が神に向かうにあたり最大の妨害となるのは罪であり、神の否定です。地上における人間の全活動から神を除外すること、人間が神

を拒むこと、これが最大の障害となります。

実際、世の救いは神のみが得意なことであり、神を拒絶するということは、それが決定的となれば破滅に、すなわち神の側から人間を拒むという(マテオ10・33参照)結果をもたらします。(…)

メッセージはあらゆる人に話しかけられたものであり、救い主キリストの母の愛は救いの御業の届くところ全てに及びます。聖母の心遣いは現在生きる全ての人々、全ての民族

貞潔・清貧・従順の道

復活されたキリストの賜である。この内なる平和は、同時に皆さんが貞潔、清貧、従順という厳しい道を歩むことによって勝ち得たものでもあります。こうした生き方を福音的なものとするのは、キリストに従うために皆さんがそれらを的確に選んだという事実です。

皆さんが独身生活と完全な貞潔を選んだ事実と、永遠の生命を信じていることを切り離して考えることはできません。死者の復活を信じるのが困難な世界にあって、皆さんは生命の充滿が死を越えたところにあること、この世での生活はその序曲に過ぎないことを宣言しておられるのです。聖アウグスティヌスによれば、独身生活とは永遠の生命について絶えず黙想するようなものであるということです。ところで、皆さんはすでに独身生活をおくっているわけですが、いずれは死す

へと広がっていきます。社会は背信に脅かされ、道徳の退廃をも招いています。道徳の崩壊は社会の崩壊を意味します。(…) ペトロの後継者は人間の無数の苦しみの証人です。諸国を、世界全体を被う黙示録的な脅威の証人です。私は、無原罪の聖母の母としての心の神秘を前にして、自らの弱みでこれらの苦しみを含み込みたいと思います。個人、国家、人類に蔓延している苦しみと悪の名のもと、ペトロの後継者は、悪よりも力強い愛の救いへと

べき体において、そうしているのです。

富がキリストの教えに対する感覚を鈍くするということを実証するのは簡単なことです。金持が天国に入るのには難しいとイエズスも仰せになったではありませんか。現代人を魅惑するこの世のものを放棄した皆さんの質素な生活を見ると、

修道者の忠実のもと 信者の忠実のもと

すべての信者は神の愛と隣人愛という福音の教えを身につけるため、離脱の精神を実行すべきことに思っているのです。

最後に、自らの意志を放棄するという犠牲を払って得た従順のおかげで、皆さんは出かけて行って聞いてあげること、また皆さんのところへ会いに来る人々の話を聞く態度を備えることができます。人間

この世の救いを確信しています。私の心は人類の上のしかかる罪の黒雲を見て悲しんでいます。同時に、前任者の行ったマリアの御心への全人類の奉獻を繰り返すことに大きな喜びを感じています。これは聖そのものである御方の世界を奉獻することです。聖性とは贖いのことであり、贖いが実現するとは、愛が悪に打ち勝つことを示します。いかなる罪と言えども、神の愛を打ち負かすことはできません。(…)

は神の似姿として造られたので、神の御旨を行うことが、人間を挫折させるものではなく、むしろ発展させるものであることを悟らねばなりません。

復活の平安へと導く誓願の道を歩むとき、皆さんはキリストの十字架に与って確実に復活へと続く道を歩んでいることを確信できるのです。

皆さんはキリストの共同体に内的受諾を必要とする生き方の模範を示しておられます。キリスト信者は自らが忠実になるため皆さんの忠実を必要としています。彼らは兄弟愛に溢れ、喜んで人々を受け入れるため、皆さんの兄弟愛と喜んで人々を受け入れる態度を必要としています。誤解の妨害を克服するため、信者の方々は修道院内外の皆さんの愛の模範を必要としています。実利中心の物質社会の危険を避けるため、神の国にすべてを賭けた皆さんの奉獻の模範が必要なのです。

(八八・十一)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費
■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要
替振郵便 神戸 3-72393